

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

本年年初に展望では、2018年の世界経済環境に関しては2017年の延長線上にあり、大きく変化する要因は見当たらず、通貨の強さも2017年の構図をおおむね引き継ぎ、ドル/円に関してはレンジ内で安定的に推移する可能性が高いと考えてきました。

堅調な米景気、FRBの利上げ観測の継続はドルを下支えし、緩やかなドルの上昇が期待できるため、大幅なドル下落のリスクは低いように考えられるものの、2017年12月のFOMCで発表されたドットチャートによると2018年は3回の利上げが予想であり、その点から考えると米国の長期金利の上昇幅は限られたものとなる可能性が高く、ドルの上値も限りがありそうで、昨年の高値水準が上値目標としてきました。

しかし、1月の相場は、年初に113円台の高値を付けて以降、ドルはじり安となり1月後半には108円前半まで値を下げました。

さらに2月に入ると、トランプ米大統領が洗濯機と太陽光パネルに対してセーフガード（緊急輸入制限）を発動することに署名し、貿易摩擦に対する懸念が拡大したことやムニューシン米財務長官が「弱いドルは貿易面で米国の利益になる」と発言したことなどをきっかけにドル安の流れが強まり、さらに米金利の急上昇と米株の急落を背景としたリスク回避姿勢の強まりから円買いが強まり、下値めどとしてきた昨年安値107円水準を下回り104円台にまで突入しました。

1

本資料は、情報提供を目的としており、投資勧誘を目的とするものではありません。掲載している情報については万全を期しておりますが、その内容について保証するものではありません。投資の最終判断はお客様ご自身でなさるようお願い致します。本資料により生じたいかなる損害については弊社及び執筆者には一切の責任を負いかねます。

ドル/円相場のトレード戦略

しかし、その後は良好な米国経済を背景にドルの買い戻しが進み 110 円台を回復する動きとなっています。

6月のFOMCでは本年4回の利上げ期待を高める内容となっており、また初の米朝首脳会談を無事こなしたことでアジアの地政学リスクも低下しており、ドル/円は底堅い動きが予想されます。もともと、米国を中心とした貿易摩擦の激化はドルの上昇抑制要因であり、この点を考慮すると年後半もレンジ相場が継続するという見方を大幅に変更する必要はないものと考えられます。

■短期展望

先週のドル円相場は、リスク・オンの流れが続き、じりじりとドルが上昇する動きとなりました。

米国の対中制裁関税第3弾が発表されたものの、その税率が当初警戒された25%を下回る10%にとどまったことや、日米中の株式指数が堅調に推移したことなどが、その背景にあります。

今週も、このリスクオンの流れが継続することが予想され、ドル円も7月高値113円18銭や年初来高値113円40銭が視野に入ってくることが予想されます。

ただし、米国が対中制裁関税第4弾の発動を示唆していることや日米通商協議で対日要求が強まる可能性があることなど、リスクオフに転換する材料も多くあります。また、今週の米連邦公開市場委員会（FOMC）での利上げが見込まれるものの、市場は追加利上げを十分織り込んでいることから、FOMCの経済予測でインフレ見通しが据え置きとなった場合にはポジション調整に絡んだドル売りが増える可能性も指摘されています。

今週のレンジは、110円50銭～113円50銭を想定します。